

# サルマン・ルシュディの半生

—— 1947から2002まで ——

大 熊 榮

## 1 ポンベイ

サルマン・ルシュディは、アニス・アフメッド・ルシュディ（実業家、1910-1987）を父とし、ネギン（旧制ブット）を母として、一九四七年七月十九日にインドのボンベイ（現ムンバイ）に生れた。子供は彼のほかに妹三人。父方の祖父はカシミール人の血を引き、「革布（レザークロス）」製造で成功し、大金持ちになった。その「革布」はインド中のレストランで使用されたと、ルシュディ自身がジョン・モーティマーとのインタビューで言っているが、このインタビューで彼は生まれ育ちを詳しく語っている<sup>(1)</sup>。父アニスはケンブリッジ大学を出て、「革布」事業を継いだ。ムスリムだったが、息子を年に一回しかモスクへ連れて行かない父親だった。「革布」工場は分離独立前の騒乱で破壊されたものの、裕福な暮らしは維持された。ただ、父はアルコール中毒気味だった。母方の祖父は医者だった。ボンベイの生家は一九八七年にルシュディがインドを訪れた際にはまだ残っていて、『真夜中の謎』*The Riddle of the Midnight* (1988) というテレビドキュメントにその映像が記録されている。しかしその後取り壊された。なお『真夜中の謎』はその製作の年に亡くなった父アニス・アフメッド・ルシュディに捧げられた。

一九五四年から一九六一年までボンベイのイギリス人学校セント・トマス・カテドラル・スクール St Thomas's Cathedral School で教育を受けた。校長はガナリー Gunnery といい、生徒八百人の男子校だが、キリスト教徒は百人しかいなかった。生徒は全員、毎日カテドラルへ行って賛美歌を歌った。十歳の時、最初の短編『虹を越えて』*Over the Rainbow* を書いたとされるが、原稿は紛失した。少年時代、ジュディ・ガーランド主演映画『オズの魔法使い』に多大な影響を受けたとルシュディ自身が告白している (WO, 9)。

## 2 イギリス留学

十三歳半ばでイギリスへ渡り、名門パブリックスクールのラグビー校 Rugby School へ入学し、弁論部や演劇部で積極的に活動した。在学中に神の存在を信じなくなった。

卒業後、一九六五年の夏にパキスタンのカラチへ両親を訪ね、イギリスへ戻ってケンブリッジ大学キングズ・コレッジへ入学、歴史を専攻した。特殊研究のテーマはイスラム教の歴史で、特にその黎明期を研究し、アルタバリの正典的著作に含まれる所謂「悪魔の詩」について特別な関心を持った。一九六八年にオナズ（優等生）としてマスター・オブ・アーツ (M. A.) を取得している。

大学卒業後、一九六八年の夏にカラチを再訪し、アメリカの劇作家エドワード・オールビー原作の『動物園物語』上演を企てたが、台詞にイスラム教徒が忌み嫌う「豚」という言葉があったため検閲に引っかかり、上演禁止となった。

## 3 イギリス市民権取得後

イギリスへ戻り、イギリス市民権を取得して、一九六八年から一九六九年にかけては、ケニントン・オーヴァル・ハウス・プロダクションというフリンジシアターに加わって役者として活動した。

一九七〇年にロンドンに住み、フリーランスの広告コピーライターになるとともに、最初の妻となるクラリッサ・ルアード Clarissa Luard と出会う。コピーライターとしては、最初シャープ・マクマナス社 Sharp MacManus で働き、間もなくオジルヴィ・アンド・メイハー社 Ogilvy & Maher へ移って一九八〇年まで勤め、その間にクリームケーキ広告用コピー “naughty but nice” (ワルだけどすてき) やチョコレートバー、アエロのためのコピー “delectabubble” (おいしくてバブっちゃう) などを流行らせた。

## 4 『グリマス』のころ

広告会社で働きながら、フィクションを書きはじめ、一九七一年には『ピールの本』*The Book of Pir* という作品を書き上げたが、出版社に拒否され、原稿も残っていない。その後『グリマス』*Grimus* を書いて、ゴランツ・サイエンス・フィクション賞へ応募したが、受賞を逸した。しかしこの作品は恋人クラ

リッサへの献辞をつけて一九七五年に出版され、「不条理 SF」としての評価を受けた。

表題「グリマス」Grimus はバルシア神話『鳥の議会』に出てくる一羽にして三十羽という鳥シムルグ Simurg のアナグラムで、神話における「神」の象徴がここでは「不死の人」の象徴となっている。われわれはこれを「複合自我」の象徴とみなすことになる。この作品に見られる文学的影響としては、『鳥の神話』や『ルバイヤート』などのバルシア神話のほか、北欧神話の『エッダ』やダンテ、サミュエル・ジョンソン、T・S・エリオット、ジェイムズ・ジョイス、フランツ・カフカ、トマス・ピンチオンなどの名前が挙がっているが、このリストにはホルヘ・ルイス・ボルヘスの名前を加えることができる。作品のテーマとしての「不死の人」という観念にボルヘスの影響が見られるからである。実際、作品の登場人物はすべて「不死」の状態にあり、主人公のフラッピング・イーグル Flapping Eagle は七百歳を越えている。この主人公がカーフ島と呼ばれる架空の島へグリマスの力でおびき寄せられ、最終的にグリマスと文字通り合体するというプロットである。このように『グリマス』に見られる文化的影響は東洋と西洋の混在というようすになっていて、その面でも「複合自我」の素地が窺われる。

## 5 『真夜中の子供たち』のころ

『グリマス』は注目を集めることがなかった。その後彼は自伝的作品を構想し、一九七六年四月にはクラリッサ・ルードと結婚するとともに、インディラ・ガンディー政権による「非常事態宣言」下のインドを訪ねて取材している。一九七七年には「ノース・ロンドン・プロジェクト」というバングラデッシュからの移民に仕事を斡旋する事業に参加した。一九七九年には最初の息子ザファー Zafar が誕生する。

その一方で、自伝的作品の膨大な草稿を十九世紀小説風の手法で書き溜めるが、それをすべて廃棄して、まったく新たな手法で書き直した作品が『真夜中の子供たち』*Midnight's Children* である。これは一九八一年二月に息子ザファーへ捧げる形で出版され、十月にその年のブッカー賞を受賞するとともに、英語で書かれた「魔術的リアリズム」の傑作として、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』と並び称されることになる。

『真夜中の子供たち』の語り手にして中心人物のサリーム・シナイはインド

独立と同時刻の一九四七年八月十五日の真夜中（午前零時）に生まれ、一九七八年の現在に至るまでにインド・パキスタン戦争やバングラデシュ独立に伴う東西パキスタン内戦などを経験して、インディラ・ガンディーの「非常事態宣言」による政策の一環として実施された断種手術の犠牲者となり、もともと架空の存在ゆえに最後は消えていく。語りの形式はフラッシュバックになっているが、通常の自伝的物語と異なり、祖父の時代へと遡って語り起こされ、父母の時代を経て、ようやくサリームの誕生となる。祖父のアーダム・アジズがドイツ留学を終えて医師としてカシミールへ戻る一九一五年からサリームが消えてなくなる一九七八年までのインドおよび東西パキスタンの歴史がアマルガムとなって封じ込められている作品である。なお、ここに登場する「モダニスト詩人」ナディル・カーンのモデルは高名なウルドゥー語詩人ファイズ・アフメド・ファイズ（1911-1984）であることがルシュディ自身によって二〇〇二年九月に明らかにされた（Step, 371-372）。

## 6 『恥辱』のころ

実の妹サミーン Sameen がロンドンの地下鉄の中で人種差別主義者の若い白人グループに囲まれて殴られる事件をきっかけに構想された『恥辱』は一九八三年に妹サミーンへの献辞を添えて刊行された。この作品はフランスの文学賞<sup>(2)</sup>を獲得した。

インド的な「恥」の感覚をめぐるこの作品では、「恥」の権化にしてイデオットゆえに無垢な人物スフィア・ズィノビアと、「恥知らず」の権化で、東西の文物を読み漁り、博学にして無頼な免疫学専門（つまりエイズ研究家）の医師オマル・カイヤーム・シャキールが三十歳の年齢差を超えて結婚し、「恥」の感覚の両極から、独裁政治という「恥さらし」の権力の営みに周道的に関与する。「イスラム社会主義」を標榜して大衆の支持を取りつけ、選挙によって政権を取るイスカンダー・ハラッパと、軍人としての地位と「イスラム原理主義」の旗印によってクーデターにより政権を取るラザ・ハイダーという二人の独裁者の内面が、『真夜中の子供たち』と同様に独特な雑種の英語によりコミカルに剥き出しにされる。

物語の背景はパキスタンと思われる架空の国で、人物たちも虚構されたものである。スフィア・ズィノビアやオマル・カイヤーム・シャキールについてはモデル問題は生じていないが、イスカンダー・ハラッパとラザ・ハイダーにつ

いては、ズルフィカル・アリ・ブットとズィヤ・ウル・ハクという現実の独裁者がモデルとして指摘されている。しかし彼ら独裁者でさえもが現実と虚構をないまぜにして作られた、ルシュディの言う「ノンナチュラル」な登場人物なのである。言い換えれば、『恥辱』もまたリアリズムからの読み方では対応できない「魔術的リアリズム」の作品にほかならない。「恥」は「暴力」を生むという点にそのメッセージがあり、「恥」の権化スフィア・ズィノビアが「暴力」の権化となって、自分の父親であるラザ・ハイダーの独裁と、自分の夫で「恥知らず」な政治的傍観者であるオマル・カイヤーム・シャキールに屈辱的な終焉をもたらすことで物語は終わる。

## 7 『悪魔の詩』まで

『恥辱』から一九八八年の『悪魔の詩』に至るまでにルシュディは一九八四年にオーストラリア、八六年七月にニカラグアを訪ね、八七年にインドを「再訪」もしくは「再帰国」する。オーストラリアではアデレードでの作家集會に参加した後、ブルース・チャトウィン Bruce Chatwin とともにオーストラリア南部を旅行し、ロビン・デイヴィッドソン Robyn Davidson と出会う。翌年七月にはサンディニスタ文化労働者協会の招きでニカラグアを訪れ、コントラが仕掛けた地雷にいつ触れるか分からない状況の中で彼は三週間にわたり、サンディニスタ支配下の国土を見て回った。折しもハーグ国際裁判所が合衆国によるコントラ支援を国際法違反と決めつけ、それを無視するように合衆国下院は当時のレーガン大統領の要請を受けてコントラへの新たな一億ドル援助を決めたばかりで、ニカラグアの危機は高まっていた。

このニカラグア訪問記は『ジャガーの微笑』*The Jaguar Smile* という旅行記にまとめられ、ロビン・デイヴィッドソンへの献辞つきで一九八七年に出版された。この本でルシュディは東洋的「自我」と西洋的「自我」の分裂を告白している。ニカラグアでのサンディニスタ革命を礼賛しているわけではなく、西洋的「自我」の部分ではそのドグマ主義を疑っている。しかし東洋的「自我」の部分では彼らの心情に理解を示す。ニカラグアはアメリカナイズされた西洋的な国で、ヤンキーへの服従隷属の歴史を持っている。彼はインド人としてその歴史に同情するのである。いずれの「自我」も彼の一部であり、「自我」の「複合性」を確認している面もある。

一九八七年の再々訪で彼はテレビドキュメンタリー『真夜中の謎』のために

一九四七年生まれのインド人にインタビューする計画を立て、インド各地を訪ねる。その多様性に触れると同時に、「インド」という単一の観念がその多様性を束ねていることを発見する。そのことを彼は十年後の一九九七年にエッセイ「豊富の国」A Land of Plentyで書いている。処女作以来モチーフとして持ちつづけていた現代人の「自我」としての「複合自我」概念をいっそう明瞭に確認するのがこのインド再々訪であった。『真夜中の謎』のフィルムは八七年秋に完成し、翌年チャンネル4で放映された。

八七年という年に、彼の私生活は大きく変化する。クラリッサ・ルアードと離婚し、アメリカ人作家メアリアン・ウィギンズ Marianne Wiggins との付き合いが始まり、翌八八年一月に結婚するからである。

## 8 『悪魔の詩』とその波紋

『悪魔の詩』はメアリアン・ウィギンズに捧げる形で一九八八年九月二十六日に刊行された。彼がこの作品に取りかかったのは一九八三年であり、完成までに五年かかった計算になる。

この作品はドイツの文学賞 German Author of the Year とイギリスのホイトブレッド賞最優秀小説に選ばれるが、十月五日にはインドで発禁となり、その後十月二十八日に南アフリカで、十一月にはバングラデッシュとスーダンで、翌八九年の二月八日にはパキスタンで、それぞれ発禁になった。そして二月十四日のセント・ヴァレンタイン・デーにはイランの当時の宗教指導者アヤトラ・ホメイニが「ファトワ」を出し、ルシュディと『悪魔の詩』の出版人たちへの暗殺許可を与えた。イギリス治安当局は直ちにルシュディの保護に乗り出し、彼を安全な場所へ置くこととなる。彼がロンドンの自宅<sup>(9)</sup>から妻メアリアン・ウィギンズとともに、慌しく姿を消したのは二月十五日である。その時のようすは、後年一九九三年に彼の家に移り住むロバート・マッカラムが詳細に伝えている<sup>(10)</sup>。

二月二十五日に、イランの民間団体「ホルダト月十五日財団」はルシュディ処刑者に、イラン人の場合は二億リヤル（当時の為替レートで約四億円）、外国人の場合百万ドル（一億三千万円）の賞金を出すと公表した。イギリス政府は「表現の自由」擁護のためにイランに抗議して大使を召還し、当時の欧州共同体（EC）もイギリスに同調して大使召還に踏み切り、それに対抗してイランも各国駐在大使を召還した。イギリスはさらに「イランとの正常な関係を保

つことは不可能だし無意味だ」としてロンドン駐在のイラン外交官を追放し、三月には国交を断絶する。

「表現の自由」を否定する「ファトワ」によって始まった『悪魔の詩』事件は、こうして大きな外交問題へと発展するとともに、不気味な暗殺者の手を恐れる出版自粛の動きも出た。『悪魔の詩』の翻訳を計画していたフランス、オランダの出版社と日本の早川書房が出版を見合わせる決定を出し、ドイツでもいったん出版が見合わせになったが、その後共同出版という形式での出版が決まった。しかしイタリアのアルノルド・モンタドーリ社は遠早く翻訳出版を決め、二月中に実行したし、四月初めまでにはフランスとオランダでも出版されたほか、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドでも翻訳が出た<sup>9)</sup>。日本での新たな出版計画は一年後の一九九〇年二月初めに持ち上がり、日本の新聞のみならず、イギリスの新聞『ザ・ガーディアン』（二月十日付）にも掲載された。イタリア人実業家ジャンニ・パルマ氏が日本語版権を取得し、初版一万五千部を刷ると発表したのである。実際には五十嵐一氏の訳で同年九月五日に上下二冊本が二万五千部刊行された。しかし極めて残念なことに訳者は勤務先の筑波大学構内で翌年七月に暗殺される。これに関連してルシュディ自身が一九九三年十一月二十四日におけるホワイトハウスでのクリントン大統領（当時）との会見後に行った記者会見で重要な発言をした。その発言内容を伝える『朝日新聞』（一九九三年十一月二十五日付）によると、日本の警察当局からの情報として、犯行は中東から中国経由で日本入りした「複数のテロリスト」で、そのうち少なくとも二名の名前が判明していると、ルシュディは語ることになる。一九九三年七月にはトルコで、トルコ語への翻訳者を囲む集會が襲撃を受け、三十七人が死亡するという事件も起こる。

「ファトア」を出したアヤトラ・ホメイニ本人は四ヶ月後の一九八九年六月に死去するが、イラン政府は「ファトワ」を撤回せず、宗教財団が暗殺者への報奨金を増額するなどして、『悪魔の詩』の著者と出版関係者の身の安全が保障されない状況が十年以上続くこととなる。

事件の原因となった作品は「英語を作り直した」とでも言うべきユニークな雑種英語で書かれ、「移民」のテーマを扱っている。主要登場人物はともに四十代初めのジブリール・ファリシタ Gibreel Farishta（本名イスマイル・ナジャムッディーン）とサラディン・チャムチャ Saladin Chamcha（本名サラウッディーン・チャムチャワラ）の二人で、「私」という語り手も登場する。「私」は作者と考えられ、登場人物の二人は作者の分身と見られる。実際、サラディ

ン・チャムチャには作者の自伝的要素が色濃く投影されていて、ボンベイの裕福なイスラム信者の家に生まれ、十三歳でイギリスへ渡り、大学教育まで受けるうちに西洋文化に同化して自分を見失い、親の反対を押し切って吹き替え声優になり、千一種類の声を使い分けながら生活している。イギリス人女性のパメラと結婚して長いが、子供がいない。ボンベイでの母の葬式に出てロンドンへ戻ろうとする時、ハイジャックに遭う。一方のジブリール・ファリシタはインドの貧困と移住と映画熱と夢想癖を背負った人物で、作者にとってもう一つの可能性としての分身である。ジブリールは父親の都合で幼いころにブーナ(現プネー)からボンベイへやってきた「移住者」で、十三歳の時から父親がやっている弁当配達人の見習いとなり、その後一人前の配達人になるが、母親を交通事故で失い、二十歳で父親に死に別れて孤児になる。弁当配達人組織の総支配人バーバーサーヒブ・マハトレ Babasaheb Mhatre の養子となった後、マハトレの紹介でボンベイ映画界(ボリウッド)入りする。最初は泣かず飛ばずだったが、クリシュナ神などが登場する「神話」ものでスターとなり、インドの膨大な映画ファンにとって、またイギリスに住むインド系移民にとって「神」のような存在になる。愛人アレルヤ(アリー)・コーン Alleluia (Allie) Cone に会うためにロンドンへ向かってハイジャックに遭う。

物語は彼ら二人がボンベイからイギリスへ不本意にも不法入国することから始まる。彼らがたまたま乗り合わせたロンドン行きの飛行機がハイジャックされ、ドーヴァー海峡の上で爆発し、二万九千二フィートの高みから彼らだけが生きて雪の積もる冬の海岸へ落下するのである。しかし、そこに至るまでに彼らは他の四十八人の乗客たちとともに四人のハイジャッカーによって百一日間も砂漠のオアシス、アル・ザムザで、機内に監禁されていた。その間に二人は過去を回想するが、ジブリールは悪夢にも悩まされる。この悪夢は霊的存在にかかわるもので、ジブリールをイスラム教の黎明期へと連れていく。海岸への落下後、ロンドンへ辿り着いてからも、しばしば現実と夢の境を見失い、悪夢の続きを見つづけるが、イスラム過激派から「冒涇的」とされたのはこの悪夢の部分である。

「移民としての再生」の暗喩となる不条理な入国の後、二人はローザ・ダイヤモンド Rosa Diamond という八十八歳の女性に匿われる。しかし警察がやってきて、イギリスでの居住権を持つサラディン・チャムチャの抗議にもかかわらず、不法入国の廉で彼を連行する。この時、逸早く変装したジブリール・ファリシタはサラディンを裏切り、傍観者を決め込むため、サラディンは後々まで



映画スターを恨み、復讐することとなる。ジブリールがローザ・ダイヤモンドの家に居候を決め込む間に、サラディン・チャムチャは警官の拷問を受け、挙句の果てに不法入国者収容所のような病院へ監禁される。そうこうするうちに彼は山羊の姿に変身し、同様に動物やら樹木やらに変身した囚人たちと脱走する。彼が向かうところはロンドンのノッティンガムにある自宅である。そこにはイギリス人妻パメラ Pamela (旧姓ラヴレイス Lovelace) が待っているはずだが、パメラはてっきり夫が死んだものと思い込み、夫婦にとって二十年来の友人でスポーツインストラクターのジャンピー・ジョシ Jumpy Joshi と不倫の関係になっている。居場所を失う半人半獣のサラディン・チャムチャはケンジントンのベッド・アンド・ブレックファースト (B&B) 兼レストラン「シャーンダー・カフェ Shaandaar Cafe」に転がり込み、バングラデッシュ出身の家主スフィアン Sufyan と彼の二人の娘ミシャル Mishal およびアナヒタ Anahita に世話になる。この B&B が位置するあたりには「移民」がたくさん住んでいて、チャムチャは彼らの生活をじっくり観察することになるのだが、考えてみれば彼も「移民」であり、そのくせ別の人間だと思っている。その差異が山羊姿となって顕現していると考えられる。ロンドンでは老女ばかりを狙って切る通り魔事件が頻発していて、警察は黒人ウフル・シンバを容疑者として逮捕する。「移民」たちはこれを不当逮捕だとして抗議運動を続けるが、ウフル・シンバ Uhuru Simba が刑務所で死に、しかも通り魔事件が再び頻発しだすと、暴動となる。シャーンダー・カフェが炎上し、パメラが働いていたビルも放火され、ジャンピー・ジョシの子供を宿して八ヶ月の身重になっていた彼女は死ぬ。こうした悲劇の後、チャムチャは父親危篤の知らせを受けて再びボンベイへ帰り、父親の死後、その莫大な財産を相続するとともに、初恋の女ジーニー (ジーナト)・ヴァキル Zeeny (Zeenat) Vakil と再会する。

一方、ジブリールはローザ・ダイヤモンドと別れてロンドンへ出るが、かつてのインドでの彼の恋人レハー・マーチャント Rekha Merchant の亡霊につきまとわれながら地下鉄を乗り回すことになる。レハー・マーチャントは自殺したのだった。亡霊にうんざりしてジブリールが地上へ出ると、かねてからロンドンでのジブリールの恋人で、高名な女性エヴェレスト登山家でもあるポーランド系「移民」アリー・コーン Allie Cone に遭遇する。彼のロンドン生活はもっぱら彼女の庇護のもとに置かれる。なぜなら彼は精神病患者として通院するようになるからである。それでも彼は自ら主演する映画の企画を立て、実現の道を模索する。その映画は彼が悩まされている悪夢を再現するはずのもの

である。しかしチャムチャからの復讐を受けたりすることで病気が悪化し、アリーの大切なものを破壊して行方をくらます。その時期が老女切り裂き通り魔事件再発と一致するのだが、彼が通り魔なのかどうかはだれにも分からない。チャムチャがインドへ帰ったところに、ジブリールもまたインドへ戻る。そこへアリーも仕事がらみで加わり、最後の悲劇が起こる。アリーもジブリールも自殺するからである。

『悪魔の詩』はほぼこうした内容の物語で、自伝的要素（サラディン・チャムチャの経歴、彼の父親の死、「シャーндガー・カフェ」とバングラデッシュ体験など）こそ濃厚だが、ジブリールの悪夢を除けば宗教的要素は希薄なのである。それにもかかわらず、この作品は人権も国家主権も無視する「ファトワ」の原因となり、グローバルな規模で出版関係者や言論人の萎縮を招く素因にもなった。

## 9 幽閉生活

一九八九年二月十五日に幽閉生活を余儀なくされてからのルシュディは、だれとも会わず、執筆活動もやめたというわけではない。またルシュディを取り巻く状況も、暗殺者が出没しているというだけのものでなく、「言論・出版の自由」を守る支援運動もイギリスから世界へと広がっていった。この状況がわれわれの研究にとって特に重要なのは、「複合自我」をモチーフとする自己中心的作家がさまざまな角度からの「他者」の目に曝され、現代社会における「複合自我」表象の意味が明瞭になるとともに深められたことである。

ここで、幽閉後の比較的表面的な動向についてまとめておくと、一九八九年四月二十六日にルシュディはオックスフォード大学の教授たちと会食したが、ムスリムの学生に気づかれ、警察の護送車で逃げ出すというエピソードがあった<sup>64</sup>。これは新聞で報じられた幽閉後初めての動きである。五月十四日付『オブザーヴァー』には、「ファトワ」の直前にエイズで亡くなったブルース・チャトウィンの最後の本『私はここでなにをしているのか』*What Am I Doing Here* についてのルシュディによる書評が掲載された。彼はこの書評の冒頭で一九八四年にチャトウィンとともにオーストラリアを旅行した時のことを回想し、チャトウィンの話術に魅了されたことも記している。六月十八日付『ザ・メール』*The Mail* にはルシュディとの幽閉後初の単独インタビューというものが掲載されたが、実際にはこれは一九八八年十二月二十四日にロンドン北部

にあるルシュディの自宅で、二十五歳のアミーナ・ミーアというアメリカ人イスラム教徒によって行われたものであることが判明した<sup>9)</sup>。内容はイギリス国内のムスリム指導者に対する批判で、『悪魔の詩』への謂れのない非難をまくしたててムスリム大衆を扇動する「ムッラー」たちの横暴を攻撃し、ブラッドフォードなどのムスリム・コミュニティが想像力や学問的探求の自由な営みを締め出す一方で「狂ったリテラリズム」を振りかざしている事態を嘆いている。

七月二日にはロンドンのコンウェイ・ホール Conway Hall で支援者の集會が開かれ、批評家マイケル・フット Michael Foot、作家マーティン・エイミス Martin Amis、労働党芸術担当者マーク・フィッシャー Mark Fisher が出席したほか、ルシュディ自身もビデオで参加した<sup>10)</sup>。

七月三十日には『サンデー・テレグラフ』The Sunday Telegraph がルシュディの妻メアリアン・ウィギンズとのインタビューを掲載した。この中でメアリアンは幽閉後四ヶ月間に五十六もの場所をルシュディが転々としていたことを明らかにしている。「処刑脅迫は最後通牒であり、議論ではない」ため、彼ら夫婦が「ファトワ」について話すことはないとも語っている。メアリアン・ウィギンズは一九四六年生まれの一人っ子で、父親はピューリタン、母親はギリシャ人だという。(ちなみに一九九九年刊の小説『彼女の足下の地面』にはギリシャ系アメリカ人とインド人の混血がヒロインとして登場する。)メアリアンは若くして結婚し、一九六七年に娘レイラ Lara を産むが、その後離婚し、娘が大学に入った一九八四年にロンドンへやってきた。それまで彼女は種々の職に就きながらものを書きつづけていて、「インド、アフリカ、アイルランドその他世界各地から来た人々の混合」であるロンドンで「植民地の経験について書きたい」と思いはじめた。そのような折にルシュディと出会い、意気投合したのだという。「二人ともかつてイギリスの植民地支配を受けた国〔インドとアメリカ〕からやってきた」からである。一九八七年前半にルシュディはクラリッサと離婚し、メアリアンと暮らしはじめる。当初の生活は二人とも小説書きに没頭する静かなものだったという。ルシュディは『悪魔の詩』を、そしてメアリアンは『ジョン・ダラー』John Dollar を書いていた。「ジョン・ダラー」はロンドンに住む第一次世界大戦の戦争未亡人シャーロットが教師となってビルマへ行き、そこで船員ジョン・ダラーと出会い、クラウン島という架空の小さな島へ出かけて人間の残酷さを目撃する物語である。その出版は「ファトワ」の時期と重なり注目されなかったが、翌年一月のペーパーバック版によって高い評価を受けた<sup>11)</sup>。

しかしながら、一九八九年八月二十六日付の『ザ・タイムズ』The Times はルシュディとメアリアンが別居していることを報じた。別居は七月に始まったとされる。理由は明らかにされなかったが、一九九一年三月三十一日付『サンデー・タイムズ』のインタビューでメアリアンは次のように語った。

「彼が犯した大きな間違いは自分が問題だと思っていることです。そんなことでは絶対になかったのです。問題は言論の自由やイギリスにおける人種差別社会だったのに、それを世間に向かって言おうとしなかった。過去二年間に彼が口にしたのはサルマン・ルシュディの今後のことだけです」<sup>(10)</sup>

彼女はルシュディがいかに「自分に執着する」self-obsessed 男かということ語った。「複合自我」をモチーフとするような作家を身近で眺めればそういうことになるという証言である。最終的に彼らが離婚するのは一九九三年である。

一九八九年が終わろうとするころに問題化したのは『悪魔の詩』のペーパーバック出版計画である。しかしこれについては版元のヴァイキング・ペンギン社が翌年一月に「著者の生命が危険に曝されている限りペーパーバックは出さない」と決定した<sup>(11)</sup>。

書評や支援集会へのメッセージを別にすると、ルシュディが幽閉後の沈黙を破るのは一九九〇年二月である。まず二月四日付『インデペンダント・オン・サンデー』紙 The Independent On Sunday に「誠意をこめて」In Good Faith と題するエッセイを発表し、続く六日にはロンドンの「現代芸術研究所」the Institute of Contemporary Arts (ICA) において、厳重な警戒の中、ハロルド・ピンターの代読による「ハーバート・リード記念講演」のための原稿「なにももの神聖でないのか？」Is Nothing Sacred? を発表した。「誠意をこめて」においてルシュディは「表現の自由」について「他人の感情を害する自由 (the freedom to offend) なしには、それは存在しなくなる」と述べた上で、自分はその「自由」を行使して「ストーリー」を書いただけであると弁明している。さらにその「ストーリー」について次のように解説する。

「『悪魔の詩』は二つの痛々しくも引き裂かれた自我の物語である。一方の自我、サラディン・チャムチャの場合、分裂は世俗的かつ社会的であ

り、簡単に言えばボンベイとロンドン、東洋と西洋の間で引き裂かれている。もう一方の自我、ジブリール・ファリシタの場合、分裂は精神的であり、魂の亀裂である。彼は信仰を失っていて、信じたいという強い欲求と信じることができないという新たな無力感の間で苦しんでいる。この小説は彼らの全体性探求に“ついでの”ものなのである」(IH, 397)

この自作解説はわれわれの視点からするときわめて重要であり、『悪魔の詩』を論じる際にもう一度触れることになる。このほかルシュディは七千語ほどのこのエッセイで、おそらく作品を読まずに騒いでいる向きのために、みずから梗概まで作成している。彼は「普通の、公平公正な精神のムスリム」へ呼びかけたのだが、ブラッドフォードのムスリム組織を率いるリアクト・フセインが直ちに和解を拒絶した<sup>(12)</sup>。

「なにものも神聖でないのか？」において彼は自ら講演できないかと警備当局に要請したことを告白している。もちろんその要請は拒否されたわけだが、「こういう機会のためにすら、昔の生活へ戻れないというのは、苦悶と挫折感を覚える」(IH, 418)と述べ、『悪魔の詩』という書名を慎重に避けながら、子供のころからの「フィクションへの愛着」を告白し、「ポスト唯一神信仰」post-godliness (IH, 417)と彼が呼ぶものは必然的に宗教的信念との葛藤をもたらすとして、次のように付け加える。

「奇跡的なものが現世的なものと共に共存するフィクション形式を開発しようとするほくの試みになにか理由があるとすれば、われわれの存在のありようを描くすべての誠実な文学的作品において、神聖と世俗というこの二つの概念をできるだけ予断を排して探求する必要があるという立場を私が受け入れているからにほかならない」(IH, 417)

世界が注目していたがゆえに緊張感がみなぎるこの講演原稿の最後に彼は文学を「取るに足りないように見える小部屋」little unimportant-looking room (IH, 429)と呼び、それはだれもが必要としているもののだとして、「世界のどこにおいてであれ、文学の小部屋が閉ざされれば、遅かれ早かれ壁が崩れ落ちてしまう」(IH, 429)と結ぶ。

この講演代説を聞いたアイルランドの作家エドナ・オブライエンはギュスターヴ・フローベールが百年ほど前に「文学の王室」the royal room of litera-

tureを要求したという話を紹介し、「文学は今や片隅に追いやられているが、政治やスキャンダルや災厄と重なると大問題になる」として、チェコの劇作家ヴァツラフ・ハヴェルや一九一六年のアイランドでの反乱に加わったパトリック・ピアス Patrick Pearse などの詩人たちの例を挙げている<sup>133)</sup>。

一九九〇年七月に『インターナショナル・ゲリラ』International Guerillas というパキスタン映画がイギリスでの上映を禁止された。フィリピンの島に本拠地を置く犯罪組織があり、それを率いる「サルマン・ルシュディ」の指図で『悪魔の詩』という冒涇的な本を出版し、イスラム世界の破壊を画策しているという三時間半の映画である。イギリス映画審査委員会 the British Board of Film Classification は「犯罪的誹毀行為」criminal libel としてこれを禁止したが、審査委員会ヘルシュディは声明を送り、「表現の自由」を守る立場から上映禁止に反対した。その結果八月十七日に禁止の決定は撤回された<sup>134)</sup>。

## 10 『ハルーンと物語の海』のころ

幽閉後初の出版物となったのは、一九九〇年九月刊行の『ハルーンと物語の海』で、十歳の息子ザファー Zafar に捧げられた。ハルーンは『千夜一夜物語』に出てくるハルーン・アル・ラシッドから取られている。ルシュディの『千夜一夜』への執心はいまに始まったことでないが、この「おとぎ話」は千夜一夜プラス・ワンとして構想されたものである。確かに子供のための「おとぎ話」ではあるが、しかし、作者自身のための「おとぎ話」もしくは寓話でもあり、幽閉生活を寓意的に語っている面や自伝的な含意も認められる。まず、最初から最後まで「物語」という概念がつきまとっているところに作者のメッセージが窺われる。彼に名声をもたらしたのも「物語」なら、彼を「永久追放」の身にしたのも「物語」だということを考えるなら、潜伏生活二年に及ぶ彼の頭の中で「物語」というコトバが蠅のように飛び回っているとしても不思議はないからである。

『ハルーンと物語の海』の表紙には機械じかけの鳥フープーの背に乗ったハルーンが描かれている。(ちなみにフープーとはペルシャ神話『鳥の会議』でシムルグの使者となる鳥である。) 主人公の少年ハルーンはいまカハニという名の月、地球の第二の月ながら、回転速度が速すぎて目に見えない月へ飛んで行くところである。カハニとはヒンドゥスター二語(ヒンディ語とウルドゥ語の総称)で、「物語」を意味する。カハニの海がほかならぬ「物語の海」であ

る。ハルーンはなぜカハニへ飛んで行こうとしているのだろうか？

この「おとぎ話」では、すべての物語は「物語の海」から水道管のようなものを伝って四方八方に流れていて、ストーリーテラーが蛇口をひねると流れ出すことになっている。ストーリーテラーは蛇口の使用を予約しなければならない。予約を一括して取り仕切っているのは大検査官ウォルラス（ビートルズの歌に登場する名前）である。ウォルラスはカハニのガップ国に住んでいる。ガップとは、これもヒンドゥスター二語で、「噂話」とか「たわごと」といった意味で、やはり「物語」に関係している。なぜならガップ国の住民（ガッピーと呼ばれる）は物語とおしゃべりが好きだからである。ハルーンはウォルラスに会うためにカハニへ飛んで行こうとしているのであるが、なぜ大検査官に会いたいのだろうか？これを知るためにはわれわれはこの「おとぎ話」の出だしの部分へ戻らなければならない。

ハルーンの父ラシッド・カリファはほかでもなくストーリーテラーのひとりなのである。かねてから「物語の海」に「物語」を予約し、目に見えない蛇口を通してその供給を受けている。ところが、物語ばかりしている彼にあきあきした妻ソラヤは「ほんとうのことですらない物語なんて、なんの役に立つの？」と言い残し、近所の面白みのない男と駆け落ちしてしまう。それ以来ラシッドは物語が語れなくなっているのである。（妻との別れは作者の現実の生活でも起こっているわけで、しかも二度目の妻メアリアン・ウィギンズともすでに事実上別れている。このことからルシュディは最初の妻とのかを息子に語る気になったのかも知れない。）

ラシッドが物語を語れなくなると、予約取り消しと見なされ、ウォルラスに派遣された水の精イフがラシッドの蛇口を取り外しに来る。ひょんなことから蛇口の取り外しを阻止するのはわれらがハルーンである。彼はウォルラスに会って直談判し、父親への物語の供給を続けてもらえれば、父親が立ち直るのではないかと考える。こうして彼はウォルラスに会いにフーパーに乗ってカハニへと飛んで行くのである。子供向け冒険物語としてはカハニでのハルーンの活躍こそ見ものである。その面白さはサチャジット・レイの映画「グーピーとバガーの冒険」に匹敵する。実際、ルシュディはこの本に脇役としてグーピーとバガーなる登場人物を配置し、「おとなのためのおとぎ話」と副題のついたレイの映画への記憶を喚起しようとしている。この映画において、魔法のスリッパを手にしたシュンディなる国へ辿り着いたグーピーとバガーは、ハッラなる国から宣戦布告がなされるのを見て、仲裁に乗り出す。ハルーンもまたカハニにお

いて戦争に巻き込まれ、仲裁に乗り出すのである。

カハニにはガップなる国のほかにもうひとつチュップ（静か、の意）という国があり、このふたつの国が戦争寸前の状態にある。それもそのはずで、ガッピーが大切にしている「物語の海」にチュップの国が毒を注いで汚染させているのである。のみならず、チュップの国の王カッターム・シュド（御用済み、の意）は「物語の海」の海底から湧き出している「物語の泉」に栓をして、この世からすべての物語を抹殺しようとしている。これに加えてカッターム・シュドはガップの王女パートチート（むだ話、の意）を誘拐し幽閉している。

チュップの国の王カッターム・シュドがすでに死んで「御用済み」となっているアヤトラ・ホメイニへの当てこすりと考えられなくもない。物語を語れなくなった父ラシッド・カリファはもとより、幽閉されている王女パートチートも、女ではあるが、ルシュディの分身と考えられる。

物語としては、今、「物語の海」と王女パートチートを救うための戦争が始まろうとしていて、ハルーンは両国の仲裁に乗り出すわけだが、危険を承知でカッターム・シュドに会いに出かける彼の力になるのは、『オズの魔法使い』における魔法の靴でなく、フープーの魔法の力である。ハルーンとカッターム・シュドの間答はこの本全体の最も重要なメッセージとなっている。物語を敵視するカッターム・シュドにたいし、「物語って面白いんだけど……」とハルーンは言う。「しかしながら、世界は面白さのためにあるわけじゃない」とカッターム・シュドは答える。「世界は管理するためにあるのだ」と。彼が物語を敵視するのは、ほかでもなく、物語の世界が管理できないからである。さいわいこの本の中ではカッターム・シュドが減び去り、物語の海は浄化され、ハルーン之父ラシッド・カリファに物語の才能が戻り、妻にして母のソラヤも戻って来る。このおとぎ話は悲しい話で始まるが、ハッピーエンドとなる。これはルシュディが父親として息子のために願う結末であったのかも知れないが、実生活は結婚と離婚の繰り返しになる。

## 11 『想像のホームランド』のころ

ルシュディは一九九〇年のクリスマスイヴにエジプトの宗教問題担当相を含む有力なムスリムたちと会い、「イスラム教擁護」embrace Islamを宣言した。十二月二十八日付『ザ・タイムズ』The Timesにルシュディは「私がイスラムを擁護した理由」Why I Have Embraced Islamという一文を寄稿し、「私



は確かに善良なムスリムではない。しかし今や私はムスリムだと言うことができる。実際、常に私の心の近くにあった価値観を持つ共同体について、私は今やその内部にいて、その一部になっていると言えるのは、幸せの源泉だ」(IH, 480)と述べた。改悛の情を示したと受け取れるルシュディの発言に水をかけるように、十二月二十七日にはイランの新たな宗教指導者アヤトラ・ハメネイが「ファトワは撤回不能」と発言し、ルシュディへの脅威がいっそう強まった。一九九一年二月十四日の「ファトワ」二周年にあたり「サルマン・ルシュディと出版社を守る国際委員会」(ICDSR)は声明を出し、ルシュディの生命の危険が以前より何倍も強まっている一方で、前年九月にイランとの国交回復を決断したイギリス政府はルシュディに対し冷淡になりつつあることを指摘した。

ルシュディ発言は必ずしも回心ではなく、一年余り後にジョン・モーティマーとのインタビューで明らかにしたことによれば、「イスラムを文化と文明として称賛する」という意味であった<sup>(15)</sup>。しかし発言当時の彼の意図は十分に理解されず、それまで彼を支持して来たアーノルド・ウェスカーやアラン・シリトーやフェイ・ウェルドンに失望感を与えたことは否めない。イギリスのムスリム指導者たちからは有罪の容認と受け取られ、「ファトワ」に積極的に服従すべきだと言われるはめになった。

一九九一年三月にルシュディは母ネギンに捧げる形で『想像のホームランド』*Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1981-1991*を出版した。『真夜中の子供たち』を出してからの十年間に書いた散文を集めた本で、題名の「ホームランド」には「故郷」のほかに南アフリカにおける「収容所」の意味が込められていることを冒頭のタイトルエッセイでルシュディ自身が説明している。「序文」を除いて七十本のエッセイと批評が十二のセクションに分類されているが、最初の二つのセクションはインドとパキスタンについての歴史的・文化論的考察に当てられ、次の五つのセクションでは「コモンウェルス」とポストコロニアリズムについての先鋭な議論が行われる。これらの議論は、最初に発表された時点で、ホーミ・バーバーのような批評家のポストコロニアリズム論に深い影響を与えた。残り五つのうちの四つのセクションは世界の作家たちとの関わりを示す批評群で占められている。そこではメルヴィル、ジョイス、ブルガーコフ、グラス、ガルシア＝マルケスなどが彼の心の拠りどころであることが明かされるとともに、V・S・ナイポールとの立場の違いが明らかにされている。最後のセクションは「ファトワ」以降に書かれた三つの弁明が中心に

なっている。すなわち「誠意をこめて」「なにもものも神聖でないのか？」および「私がイスラムを抱擁した理由」である。

一九九一年七月十一日には『悪魔の詩』の日本語版翻訳者五十嵐一氏が暗殺されたが、日本パキスタン協会のスポークスマンは愚かにも同日次のように述べた。「暗殺は完全に百パーセントあの本と関係している・・・本日われわれは互いにおめでとくと声をかけあった。だれもが心底喜んだ」(MacDonough, 163)

翌日十二日、ルシュディは声明を出し、哀悼の意を表するとともに、各国政府に同種事件の再発防止を訴えた。その内容は次のようなものである。

「五十嵐一氏暗殺の報に接して失意落胆の念に耐えない。ご遺族に哀悼と深い同情の気持ちをお伝えしたい。ほんの二、三日、【悪魔の詩】のイタリア語版翻訳者エツレ・カプリオロ氏が類似の恐るべき攻撃を危うく逃れたばかりである。二つの事件を結びつけることを避けるのは難しい。一九八九年二月にイランが出したファトワにより生み出された危機は最近のニュースから消えはじめていた。持続する脅威に対してイギリスのニュースメディアの興味をつなぎとめておくことは、実際問題として不可能に近い。しかしながら、メディアのこの沈黙にも関わらず、ファトワで名指されたものへの危険度はどう見ても増大している。ファトワについてなすべき唯一のことは時間をかけて静かに終わらせることだと（とりわけイギリス政府によって）示唆されてきた。五十嵐氏の暗殺とカプリオロ氏の刺傷事件がわれわれに示しているのは、そのやり方では要するにうまく行かないということだ。それゆえ私はイギリス、イタリア、日本の各政府のみならず、ムスリム国や非ムスリム国を問わず、世界中の政治指導者にイラン政府への緊急声明を出すように訴えたい。これ以上無実の人々が死ぬ前にファトワを撤回することは、国際法、人道主義的原理、そしてなによりもイスラムそのものの本質的に慈悲深い特質からの要請にほかならない」(MacDonough, 163)

彼の訴えに耳を貸す政府は現れなかったばかりか、イギリス政府は「ファトワ」撤回の要請がベイルートのアメリカ大使館人質事件の解決にならないと判断し、同じ七月十二日にその旨の手紙を政府担当相がPENアメリカセンターへ書き送った。イギリス人テリー・ウエイトその他の西洋人が人質になってい

た。

十一月十一日は幽閉後千一日目に当たり、ルシュディの好きな『千夜一夜』にちなんで合衆国PENが抗議デモを行った。ノーマン・メイラーその他の作家たちもこのデモに参加した。ロンドンでは人質事件の関係でデモが許可されず、チャリング・クロス・ロードのウォーターストーン書店で支援書簡公開朗読会が開かれた。参加者にはマーティン・エイミス、ハロルド・ピンターなどの作家たちがいた。

十二月十二日にはアメリカのコロンビア大学で開かれた「権利の章典」成立二百周年記念集會にルシュディはゲストとして出席し、一年前の「イスラム抱擁」について「間違이었다」と認め、『悪魔の詩』を書いたことで「後悔したことはない」と言い切った。この時のスピーチで彼は「世界が二つに分かれて争っているが、私の魂も二つに分かれて争っている」という趣旨のことを言い、「複合自我」的存在ゆえの苦惱を覗かせた (MacDonough, 168)。

この問題についてルシュディは一九九二年二月十六日付『サンデー・タイムズ』でのジョン・モーティマーとのインタビューで次のようなやりとりをしている。

「あなたは一種のオリーブの枝をムッラーたちに差し出し、イスラムの『物語』は『ほかのどの偉大な物語』よりもあなたにとって意味があったと言いましたね。しかしあなたは神を信じないままそういうことが言えると思ったのですか？」

「それこそほくが言いたかったことですよ。しかし彼らに乗せられて以前より自由な説明をするうちに、ほくの言葉は少し捻じ曲げられてしまった。ほくはイスラムを文化と文明として称賛すると言うつもりだったんですが、今にして思えばああいうことを言ったのはおそらく間違いでしたね」<sup>(16)</sup>

ここにも同じ「複合自我」ゆえの苦惱が窺える。

一九九二年二月十四日には彼の友人たち主催による「なにをなすべきか？ - 『ファトワ』三周年」という集會がロンドンで催され、ギュンター・グラス、トム・ストップード、マーティン・エイミスが講演したほか、エドワード・サイード、ナディン・ゴードイマー、シーマス・ヒーニー、ディレク・ウォールコットの声明がビデオで紹介され、さらにルシュディ自身が予告なしに会場へ

姿を見せて、「ぼくは無人間 unnperson になることを拒否する」と語った (Mac-Donough, 172)。

三月二十四日に彼はアメリカのワシントンに突然姿を見せ、アメリカン・ユニヴァーシティ (AU) 主催の集会に出席して、匿名共同出版による『悪魔の詩』ペーパーバック版の発行を告げた。しかし予定されていた上院、下院の幹部との会見はイギリス政府の意向により取り消された。

## 12 『オズの魔法使い』のころ

一九九二年三月には幽閉後三冊目の本として、六十頁ほどの小冊子『オズの魔法使い』*The Wizard of Oz* が刊行された。これはイギリス映画研究所 British Film Institute (BFI) 編集の「BFI フィルム・クラシックス」シリーズの一冊で、彼はそこで一九三九年に作られたジュディ・ガーランド主演 MGM 映画を「移民」のメタファーとして読み解くとともに、この映画批評の副産物としての「ルビーの靴のオークションにて」という新作短編を収録した。この短編は一九九四年刊短編集『東、西』*East, West* に収められるが、「東と西」でなく、単に「東、西」としたこのタイトルの出典はこの小冊子に引用されている「東、西、家庭が最高」*East, West, home's best.* (WO, 23) という標語にある。この小冊子は彼が幽閉中の時間を使ってビデオを見ながら書き上げたもので、スウェーデンのトゥチョルスキー賞を受賞した。

「最初の文学的影響」(WO, 9) を受けたのは十歳の時に初めて見たこの映画 (原作でなく、映像作品) だったという告白に始まるこの評論では、L・フランク・パウムの原作との相違はもとより、現代映画批評になじまない「オーサーレス・テキスト」としての性格や音楽、背景、テクニカラーについての分析を行っている。原作では「銀の靴」であったものが映画では「ルビーの靴」に変わった経緯から、その後その「ルビーの靴」がオークションにかけられる話まで紹介し、配役が二転三転したことも暴露して、「映画を作る経験は映画を見る経験とは多かれ少なかれ無関係である」ことを実感したと彼は書く。もちろん彼の主眼は映画テキストを「移民」のメタファーとして見るところにある。ヒット曲「虹の彼方に」*Over the rainbow* は「根っこを抜かれた自我への賛歌」*a grand paean to the Uprooted Self* (WO, 23) であり、ドロシー・ゲイルも「オズの魔法使い」その人も、キャンザスから「エメラルド・シティ」へやってきた「移民」なのである (WO, 54)。このように彼のコメントはしば

しば彼自身のモチーフへと結びついている。注目されるのは、幽閉後に彼が抱いた「不可視性」のモチーフがここに初めて顕在化した点である。彼はスター俳優たちの代役をする「スタンドイン」に同情し、「画面に全身で映っている時でさえ、スタンドインたちは目に見えないものとされている」(WO, 46)と指摘した上で、オークションにかけられた「ルビーの靴」は、実はサイズからしてジュディ・ガーランドが履いたものでなく、彼女のスタンドインを務めたボビー・コシェイのものだったのではないかと推測し、それを買った「映画ファン」への想像を逞しくした結果、短編「ルビーの靴のオークションにて」を書いたのだった。「不可視性」のモチーフは『彼女の足の下の地面』*The Ground Beneath Her Feet* (一九九九)に一人称で登場するウミード・マーチャントを通して表象される。

『オズの魔法使い』の「文学的影響」は『真夜中の子供たち』に現れていることをルシュディ自身が告白している。具体的にはサリーム・シナイがインディラ・ガンディーの悪夢を見る時、その手が「緑」、爪が「黒」になっているところである (M, 422)。「そこではインディラ・ガンディーの悪夢が負けず劣らず悪夢的なマーガレット・ハミルトンの姿と融合している。東の国の邪悪な魔女が西の国の邪悪な魔女といっしょになっている」(WO, 33)とルシュディは言う。マーガレット・ハミルトンは「西の国」の魔女を演じた。「東の国」の魔女は映画ではすでに死んでいるのだが、ここではインディラ・ガンディーを指している。また、『オズの魔法使い』に明らかに影響を受けた自分以外の作家として、ルシュディはアンジェラ・カーターとトマス・ピンチョンの名前を挙げる。

『ハルーンと物語の海』を書く際にも、ルシュディは「最もふさわしい声」を映画『オズの魔法使い』に見つけたと言う (WO, 18)。この映画の「文学的影響」としてはさらに、短編「ルビーの靴のオークションにて」が加えられることとなる。これはドロシー・ゲイルを思わせる「いとこゲイル」への片思いのために競売で是非とも「ルビーの靴」を競り落とそうとするが、結局あきらめる男の話である。同時にここには競売場へ集まる群衆の異様さも活写されているが、それは狂った「西」の一面でもある。もうひとつ、『彼女の足下の地面』には「ザ・ウィッチ」というロンドンのブティックが登場し、店の窓には「西の国の邪悪な魔女」が描かれている (GBF, 283)。こうした事例は『オズの魔法使い』に対するルシュディの偏愛ぶりを示すものである。

一九九二年五月二十六日には日本のTBSテレビがルシュディとのインタ

ビューを放映した。その中で彼は五十嵐一氏暗殺事件についてこう語った。

「イスラムについての立派な学者であり、きわめて同情的な本を何冊も書いて日本の読者にイスラムを紹介したかたで、そういうかたが暗殺されるというのはなんともおぞましいことです」(MacDonough, 177)

事件から一年の七月十日に彼は声明を発表し、「神であれイデオロギーであれ、いかなる名においても人間を殺すことは、絶対に容認できない。そういう殺人において、殺人者の側にモラリティがあることは絶対にない」(Step, 216)と述べた。

その後彼は七月二十七日にスペインのマドリッドでマリオ・バルガス・ジョサとともにセミナーに参加し、八月十九日から三日間ノルウェーに滞在した。さらに九月八日から三週間アメリカのコロラド州ボルダーでシンポジウムに出席、十月十三日にはフィンランドのヘルシンキを訪れて、「北欧評議会主催国際文化会議」the Nordic Council's International Conference on Cultureで講演した。彼はその講演でミラン・クンデラのエッセイ「ヨーロッパ小説の文化」に言及しつつ「『悪魔の詩』が読まれずに断罪されているのはなんと悲しいことだろうか。おそらくこれは小説が断罪される時に常に起こることなのかも知れない。これは真実の瞬間だ。小説の文化は自己防衛できるだろうか」(MacDonough, 180)と述べた。

ヘルシンキから戻った直後に彼は警備責任者から警備の打ち切りを告げられるが、政府の政治判断で方針が変わり、警備は続けられることとなった(Step, 226)。

十月二十六日に彼はドイツのボンを訪れ、ドイツPEN会長や政党党首、政府高官と会って、支援表明を受ける。これに対してイラン政府は十一月二日にドイツ駐在大使を通じて怒りを表明するが、ドイツ政府はルシュディ支援を改めてイランに通告する。同日にイランの「ホルダト月十五日財団」は懸賞金増額を発表した。十一月五日にルシュディは『ハルーンと物語の海』に対するクルト・トゥッチョルスキー賞授与式出席のためスウェーデンへ行き、スウェーデン・アカデミーで講演して、「イラン政府を怒らせているのは、自分の考えでは、『悪魔の詩』が一人の人間の外部でなく内部に存在する善と悪をめぐるものだという事実だ」(MacDonough, 182)と述べた。これは「複合自我」のモチーフに関係する発言である。つまり悪が「悪魔」として外在することと

「神」の存在は密接に関連しているわけで、それらの存在を信じなければ、悪は人間の内部にあり、しかもその内部には悪も善も共存しているということになるからである。十一月十一日には「ホルダト月十五日財団」が有志暗殺団派遣を発表した。ルシュディは十二月初めにカナダPENの招きでトロントへ行き、作家や政治家からの支援表明を受けた。カナダ政府は「ファトワ」を撤回するまでイランに対する十億ドル借款契約を凍結すると決定した。

### 13 ケンブリッジでの講演のころ

「ファトワ」四周年の一九九三年二月十四日にルシュディは母校ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジ・チャペルで講演した。一九六五年から一九六八年までの在学時代を回想し、歴史専攻の卒業論文資料として読んだものに含まれていたのが「預言者マホメットのいわゆる悪魔の詩もしくは悪魔の誘惑と、誘惑拒絶の物語」だったと明かした。

『悪魔の詩』の物語はほかでもなく古典的な作家アルタバリの正典的著作に見出される。彼によれば、預言者はある時、メッカで最も人気のある三人の異教の女神たちの神聖を容認しているように思える詩を与えられ、イスラムの厳格な一神論を危険にさらすこととなった。後に彼はこれらの詩を悪魔の策略として拒絶し、悪魔が大天使ガブリエルの姿を装って自分に現れ、『悪魔の詩』を口にすると語った。

歴史家たちはこの出来事を長い間あれこれ考えてきた。生まれたての宗教がメッカの異教の当局者たちに一種の取引を持ちかけられ、それに気持ち揺れたが、やがて拒絶したということもありうるのではないかと疑ってきた。私はこの物語が預言者を人間的にし、それゆえ現代の読者に対し彼をもっと近づきやすく、もっと理解しやすいものに行っていると感じたのだ。現代の読者にとって人間の精神に宿る懐疑や偉大な人格の中の人間的不完全さはその精神と人格をいっそう魅力あるものにするだけだからだ。実際、預言者伝説によれば、大天使ガブリエルでさえこの話に理解を示し、その種のことはすべての預言者に起こることで、すでに生じたことを心配する必要はないと言って、彼を安心させたという。大天使ガブリエルと彼がその名において語る神のほうが、やがて神の名において語りたがるようにするものたちの一部よりも、はるかに寛大だったように思える」(Step,

230)

このように述べた後、ルシュディは「ファトワ」を「テロリストむき出しの脅迫」(Step, 230)だと非難し、西洋と東洋におけるその悪影響を指摘している。出版見直し、テキスト書き換え、自己検閲、書籍販売自粛などのほか、知識人の投獄、出版関係者への暴力、翻訳者暗殺などが起きている、と。

これに加えて「世俗的」secular という言葉の意味を強調する。「『悪魔の詩』は部分的に宗教的信仰という素材を扱う明確に世俗的なテキストである」と彼は言う (Step, 231)。ネルーやガンディーの「世俗主義 secularism (政教分離主義とも訳される)」がインドのムスリム・マイノリティを守ったという「歴史」に触れつつ、「インドのムスリムは常に世俗主義の重要性を理解してきた。私自身の世俗主義の源泉となっているのはその経験である。過去四年間に、この世俗主義という理念とその副次的原理である多元主義、懐疑、寛容への関わりは二倍にも三倍にも深くなった」(Step, 232)として、自己の立場を明確化している。同時に、かつて「移民」の代弁者を意識的に努めたルシュディの思想が幽閉後にどの方向へ向かっていたのかも、ここに明らかになっている。

「世俗主義という理念とその副次的原理である多元主義、懐疑、寛容」——これこそが『悪魔の詩』以降の彼の思想の核となっているのであり、そこに「複合自我」概念も含まれると考えられる。

一九九三年二月二十二日に当時のメイジャー首相はルシュディとの面会の用意があることを発表した。が、イランとの関係に配慮して、面会時期は延期になった。

六月にルシュディはパリで開催されたアカデミ・ユニヴェルセル・デ・クルチュール the Academie Universelle des Cultures 主催の集会に参加し、エリー・ヴィーゼル、ウォル・ショインカ、ウンベルト・エーコ、シンシア・オジックなどとともに、アルジェリア、エジプト、トルコにおける世俗主義者に対する原理主義者の攻撃に抗議した。

七月二日にトルコのシヴァスでイスラム原理主義者がホテルを襲撃し、少なくとも四十人が死亡し、百五十人が負傷する事件が起きた。原因は世俗主義ジャーナリストのアジズ・ネシンが自分の編集する新聞『アイディンリク』Aydinlik に数週間にわたって『悪魔の詩』の抜粋を無断で連載し、原理主義者を刺激したことにある。ホテルでは十六世紀の反逆的詩人にちなむ記念パーティが開かれていて、著名な世俗主義的知識人が集まっていた<sup>(17)</sup>。この事件につい



てルシュディは『オブザーヴァー』に抗議声明を発表し、「ネシンとその協力者たちは私と私の作品をトルコにおいて増大する宗教的狂信への戦いに弾薬として利用している」<sup>(48)</sup>と激しく非難した。しかしこの声明は世俗主義者のルシュディが同じ世俗主義者を非難したものとしてアレクサンダー・コックバーンに批判され<sup>(49)</sup>、ルシュディは弁明を余儀なくされた。その弁明で彼はコックバーンの誤解を指摘し、アジズ・ネシンの「子供っばい行動」を改めて非難した (Step, 242)。

ルシュディはこの年の七月にポルトガルを訪れて、マリオ・ソアレス大統領と会い、九月にはチェコのブラハを訪れ、ヴァツラフ・ハヴェルと会って、支援表明を受けた。十月には『真夜中の子供たち』がブッカー賞創設以来の最もすぐれた作品として「ブッカー・オブ・ブッカーズ」the Booker of Bookersを受賞し、十一月二十三日にはMITから名誉教授の称号を贈られた。またこの年にはメアリアン・ウィギンズと正式に離婚した。

一九九三年十月にはオスロでノルウェー語訳『悪魔の詩』を出版したウィリアム・ナイガード William Nygaard が撃たれ、重傷を負った。

## 14 タスリマ・ナスリン支援のころ

一九九四年にはフェミニスト作家タスリマ・ナスリンをめぐる「女ルシュディ」事件が起こる。彼女は一九六二年八月二十五日に当時の東パキスタンに医者の娘として生まれ、自らも医者となって生地のみメンシング Mymensingh で産科の開業医をしていたが、一九九〇年からはバングラデッシュ政府機関で働きはじめ、詩と小説の創作活動を活発化させる。一九九二年には彼女の作品を販売する書店への原理主義者による襲撃事件が起きて、事件が表面化し、一九九三年秋に出版された彼女の小説『ラジャ (恥)』とそれに対する原理主義者の「ファトワ」要求によって、事件が国際的に知られることとなる。一九九四年五月に彼女はカルカッタで発行されている『ステイツマン』誌に寄稿し、『コーラン』は全面的に改定されるべきだと述べたことから、大規模なデモと暴動を誘発した。バングラデッシュ政府は十九世紀にできた冒涇法によって彼女を逮捕、裁判にかけて有罪とした上で保釈し、スウェーデンへの極秘出国を認めた。一九九八年に自伝『メイェベラ、ベンガルでの少女時代』を出版し、一九九九年九月にバングラデッシュへ極秘に一時帰国したが、現在もスウェーデンに亡命中である<sup>(20)</sup>。二〇〇二年八月には自伝続編『ワイルド・ウインド』

を出した。

『ラジャ (恥)』はベンガル語で書かれて一九九三年に出版され、作者の英語版(一九九七)への「序文」によれば、「五万部がすぐに売り切れた」(Shame, 10) とされるが、ほどなく発禁になる。一九九二年に激化したヒンドゥー・ファンダメンタリストとムスリム・ファンダメンタリストの対立を背景に、バングラデッシュにあつては少数派のヒンドゥー教徒に対するムスリム・ファンダメンタリストによる迫害を描いたリアリズム小説である。ヒンドゥー教徒の家族(医師スタメイ・ドゥッタと妻キランメイ、および息子のスランジャンと娘のマヤ)が、迫害にもめげずにバングラデッシュに踏みとどまるものの、一九九二年十二月六日から二週間の間にムスリム・ファンダメンタリストから受ける酷い仕打ちによって瓦解するという物語である。マヤは惨殺死体となって川に浮かび、スランジャンはそれまで共鳴していた共産主義にも国家の未来にも絶望し、バングラデッシュを捨てる。親たちはただ打ちひしがれ、しかしなすすべもなく荒廃した国に残る。スランジャンは男だが、作者の思想や立場が彼に託されていると思われる。

ルシュディは一九九四年七月にタスリマ・ナスリン支援のため彼女への公開書簡を書いた。その中で彼は自分の体験から次のように忠告する。

「気難しい女だとか、自由恋愛の擁護者(これが最も恐れられているわけですが)だとかと、あなたがあらゆる種類の悪者にされているのを見聞きしています。このような状況では人格攻撃 character assassination は通常のことであり、割引して考えなければならないことを、あなたを支援するわれわれはよく知っています。そのことを肝に銘じてください」(Step, 253)

ちなみにルシュディに対する「人格攻撃」を一貫して行ってきたのは大衆新聞『デイリー・メール』The Daily Mailで、その中心となっているメアリー・ケニー Mary Kenny に対し、彼は一九九三年九月にやんわりと反論し、彼に投げつけられた非難の形容詞をすべて集めて見せた。すなわち「行儀悪い、むっつりしている、優雅さに欠ける、愚か、意地悪、魅力がない、小心、傲慢、自己中心的」の九つである(Step, 245)。この種の「人格攻撃」が『デイリー・メール』に限らずもっと広範囲に行われていたことをわれわれはいずれ検証し、「複合自我」と「他者」の関係を考察したい。

## 15 『東、西』のころ

一九九四年十月に彼は初の短編集『東、西』East, West を刊行する。タイトルは彼の自我の中身を物語っている。東洋と西洋が調和しないままに混在しているのである。しかも、否応なく、西洋的なものが常に東洋的なものを見下している。断罪されようと、どうされようと、この自我の中身は変えようがない。五年間の絶望の果てに彼が辿り着いた結論がこのタイトルである。中身は幽閉前に書かれた作品が五編、幽閉後が四編で、合計九編の作品が「東」「西」「東、西」の各セクションに三編ずつ収められている。そのうち「ルビーの靴のオークションにて」はすでに触れた小冊子『オズの魔法使い』からの再録である。

『東、西』の中の九編中、最も早期に書かれたと思われる作品は「天球の調和」であり、一九七一年ごろの創作と推定される。カーン Khan という名前で登場する作者の分身は一九七一年に「フリンジシアター」(EW, 136) で活動しているが、これはルシュディの伝記的事実に合致している。『天球の調和』と題する古今東西のオカルト研究書を書いた友人エリオット・クレインとの交友を通じて、カーンという名前の「私」が「悪魔」の存在に興味を示すが、結局それを信じる事ができないという物語である。エリオットは精神分裂病によって死ぬが、残された手記には悪魔的な行状が記され、カーンの妻マラが「それは幻想ではない」(EW, 146) と肯定する不気味な言葉で終わる。

この短編においてカーンはケンブリッジに住むインド人として「火星からの侵入者」(EW, 127) のように扱われながら、エリオットの多彩な「禁じられた知識」(EW, 141) に触れるうちに、「禁じられた自我」(EW, 141) の形成ができるのではないかと思いはじめる。それは彼の中の「二つの他者性、二重の不帰属の間に橋をかけること」(EW, 141) によって形成される「自我」である。これはルシュディが『グリマス』以降の作品で表象化する「複合自我」のテーマにほかならない。その原型的イメージは「東、西」の混在なのである。

「天球の調和」に続くのは『真夜中の子供たち』の余勢を駆って書かれたと思われる三編である。「東」セクションの「無料ラジオ」The Free Radio (1983) と「預言者の髪の手」The Prophet's Hair (1981)、および「西」セクションの「ヨリック」Yorick (1982) である。

「無料ラジオ」は年老いた元学校教師が教え子の若い人力車夫ラマニ Ramani の身の上を心配する話である。映画スターにでもなれそうなほどハンサムなが

ら、頭がやや「ソフト」なラマニは十歳年上の「泥棒の未亡人」と呼ばれる女と相思相愛になり、結婚を望む。しかし、女はすでに亡夫の子供を抱えていて、それ以上の子供は欲しくないという理由から同意しない。ただ、政府が推進する断種手術を受けて「無料ラジオ」をもらった男の話を持ち出し、女はそれとなくラマニに手術を勧める。「無料ラジオ」と女の誘惑に負けたラマニは手術を受けて、女と結婚し、最後まで届かない「無料ラジオ」をひたすら待ちつづける。自分がラジオになって架空放送をしながらデリーの街で人力車を引く日々を送る。一年ほどしてようやく「無料ラジオ」を諦めると、人力車夫業にも見切りをつけ、映画スターになろうと、家族を引き連れボンベイへ向かう。字が書けない彼が代筆業者に頼んで送った元学校教師への手紙には、一躍スターになって羽振りのいい生活を送っていることが書かれているが、元教師はそれが空想であることを見破る。『真夜中の子供たち』で扱われたインディラ・ガンディーによる「非常事態」宣言下の「断種・不妊」政策が後々まで影響を及ぼしている話でもある。

「予言者の髪の毛」はカシミール地方でのムスリムにおける一種の偶像崇拜を揶揄した作品である。偶像崇拜を禁じたイスラム教の信者がマホメットの髪の毛を神として崇めている。その髪の毛がふとした偶然から、ある金貸しの手に入る。この金貸しは原理主義者で、『コーラン』以外に信じるべきものはなく、偶像崇拜を苦々しく思っている。入手した髪の毛を隠匿すれば偶像崇拜はなくなるはずだと考え、万策を尽くして隠そうとする。一方で、家族には、毎日の『コーラン』の朗読をはじめとして、厳格な信仰生活を強制するため、音を上げた息子と娘が一流の泥棒に髪の毛を盗ませようと計画する。こうして、読み物としてスリリングな展開を見せながら、物語は一家の破滅という悲劇へ向かうのである。ことの起こりが一本の髪の毛というところに信仰の恐ろしさとはばかばかしさがある。そういうばかばかしいものはとても信じられないというルシュディの無神論が鮮明になっている作品である。シュリナガルには「聖髪」を祀るモスクがあり、一九六三年にその紛失事件があった<sup>(21)</sup>。ルシュディがこの事件をヒントにした可能性はあるが、カシミールとイスラム信仰の組み合わせは『真夜中の子供たち』におけるアーダム・アジズの最初のエピソードを想起させる。

「ヨリック」はルシュディが『真夜中の子供たち』を書く際に影響を受けたと自ら認めるローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』（一七五九-六七）に登場する作者の分身にして牧師のヨリックを主人公にしている。

「西」セクションの作品にふさわしく「メタファーと古典へのアリュージョン」(EW, 67) からできている。

『トリストラム・シャンディ』におけるヨリックの家系は「強靱な子羊皮紙」strong vellum (Tristram Shandy, 53) に書かれ、その保存状態は申し分がない。それによるとこの家系はデンマークに起源があり、祖先の一人がホーウェンディラス Horwendillus 国王の時代に宮廷に仕えていたと記されている。その人物の職務はその後廃止されたとあって、具体的に記されていないが、『トリストラム・シャンディ』の語り手の大胆な推測によると、シェイクスピアの『ハムレット』に嚆矢となって登場する「国王の主任道化師」ヨリックではないかというわけである。しかしながら「この点を確かめるためにサクソ・グラマティカスのデンマーク史を覗く暇がない」(Tristram Shandy, 53) と語り手は煙に巻いている。

ルシュディの「ヨリック」は「強靱な子羊皮紙」へのアリュージョンから始まり、『ハムレット』の謎に迫る。ハムレットは父親の名前を知らなかったようだが、それはなぜかという謎である。「強靱な子羊皮紙」に書かれていることからすると、ホーウェンディラス国王の「主任道化師」ヨリックにはオフィーリアという妻がいる。彼女は年齢が「夫の半分以下」で、容姿の美しさは「倍以上」(EW, 66) ということになっている。「半分」や「倍」という表現から『ハムレット』は「算数の悲劇」(EW, 66) ということにもなるが、これは『ユリシーズ』第九章において『ハムレット』が「代数の悲劇」とされることへのアリュージョンである。ジョイスの場合もそうだが、ルシュディはここで『ハムレット』伝説の異本を空想する。

それによるとヨリックは王子アムレサス Amlethus (劇中のハムレット) の遊び相手にさせられるだけでなく、寝取られ夫にもなる。国王が妻のオフィーリアを寝取るからである。ヨリックは職業的道化と実生活での道化という「二重の道化」(EW, 77) となる。ここに付け込むのが少年王子アムレサスである。彼は父ホーウェンディラスが母にして女王のガートルードにのしかかる場面を目撃し、父が母を殺しかけたと思い込んでいる。その復讐の道具として王子は道化ヨリックを使う。ホーウェンディラスの耳に毒を注ぎ込むのは王子に唆されたヨリックである。一方オフィーリアは夫に不貞を責められて気が狂う。この狂気が国王の弟クローディアスの目に留まり、国王殺害の真相が解明され、ヨリックは処刑される。歳月が経ってアムレサスはシェイクスピアの芝居でのハムレットとなり、自分と同じ名前の先王の亡霊に取り憑かれるが、それは自

分自身の犯罪の亡霊であり、頭がおかしくなる。その結果、恋人オフィーリアをヨリックの妻のオフィーリアと取り換え、邪険に扱って死に追いやる。

ルシュディによるハムレット伝説のこのような異本はアリュージョンと才氣に富んでいて、そこにこそ「西」の文学的遺産があることを物語っている。「強靱な羊皮紙」に注目する着想はガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』に影響されたとも考えられる。『百年の孤独』は羊皮紙にサンスクリットで書かれた一族の物語の翻訳ということになっている。

「役立つ忠告はルビーよりも希少」 Good Advice Is Rarer Than Rubies (1987) は『悪魔の詩』執筆と同時期に書かれ、テーマも同じで、「移民」の問題を扱っている。レハナはおそらく十代後半の娘で、乳母（アヤ）の仕事をしている。彼女がまだ九歳の時に親が決めた婚約を履行するために、二十一歳年上の婚約者ムスタファ・ダールを訪ねてイギリスのブラッドフォードへ行くことになる。彼女はまだ夜明け前にバスでラホールを出発し、ビザを取得すべくイギリス領事館へやってくる。そこでは申請者が長蛇の列をなし、延々と待たなければならない。詐欺師のムハマド・アリアがやってきて、彼女に偽のパスポートを売り込みにかかる。彼女はそれに取り合わないだけでなく、申請書類を書き間違えてビザも取得できないまま、しかしうれしそうにラホールへ帰っていくという話である。インド側で起きている「移民」の今日の事情の一端を垣間見せてくれる短編である。

「チェホフとズルー」は一九九一年五月二十一日のラディブ・ガンディー元首相暗殺事件の後に書かれている。暗殺を他人事と思えないルシュディ自身の境遇が投影された作品である。物語は一九八四年から始まる。物語の枠外にある背景を説明すると、その年、インド政府はシク教徒の多いパンジャブ州で独立運動が激化したため、そこを危険騒乱地域に指定し、六月初めにシク教総本山ゴールデン・テンブルを軍事攻撃して制圧したが、これに反発して十月三十一日にシク教徒警護兵がインディラ・ガンディー首相を暗殺する。インドでのこの不穏な動きを背景にして、物語はイギリスで展開する。シク教徒のチェホフとズルーはロンドンのインド大使館に勤務する保安担当外交官で、ガンディー暗殺事件を受けてロンドンのシク教徒コミュニティを内偵することになる。直接にはズルーが実行した危険な調査の結果、ロンドンのシク教徒もガンディー暗殺に無関係でないことが判明するが、彼らの努力は報われない。そのためズルーは外交官を辞めてボンベイへ帰り、警備会社を設立する。チェホフは保安要員として出世し、一九九一年にはラディブ・ガンディーの身辺警

護をしていて、タミル人女性による自爆テロのために元首相とともに命を落とす。

プロットはそのようなものだが、この短編が「東、西」セクションに分類されている理由は、シク教徒の登場人物たちの西洋かぶれにある。その象徴として彼らは映画『スタートレック』に入れ込み、その登場人物の名前で互いを呼び合う。「ロンドンが大好き」(EW, 155)とチェホフは叫び、二人でスカッシュを楽しみ、ストラットフォードヘシェイクスピアの芝居を見に行く。外見はターバンを巻いたシク教徒の内面がここに窺える。同時に彼らは植民地支配を受けたインド人としてイギリスへの批判的見方も持ち合わせている。「イギリスの労働者階級は自分たちの利益のために植民地計画に協力した」とチェホフは言う。彼はまたイギリスがネルーやマハトマ・ガンディーなどの「革命主義者」(EW, 164)を育てたことを指摘し、パキスタンを建国したもつたちやパンジャブ州でのシク教徒の騒乱を煽っているのも、すべてイギリス帰りだと言う。しかしながらチェホフは自爆テロに巻き込まれて死ぬ直前に、インド土着のテロリストが育ってきたことに気づくのである。

「クリストファー・コロンブスとイザベラ女王」は「ムーア人の最後の溜め息」を構想する過程で書かれた作品と考えられる。女王がグラナダへ進攻すると、「ムーア人は最後の降伏を準備する」(EW, 113)という記述がそのことを暗示している。物語の主眼はイザベラ女王がなぜコロンブスの大航海計画を受け入れたかという問題についての推測にある。女王とコロンブスの間にエロティックな関係が暗示され、女王はコロンブスを気まぐれに近づけたり遠ざけたりする。しかも彼女には飽くことのない征服欲がある。「彼女は土地をたくさん呑み込めば呑み込むほど、また兵士をたくさん嚙下すればするほど、ますます飢餓感を覚える」(EW, 112)のである。彼女のこの欲求不満は「未知なるもの」(EW, 116)の征服によってしか満たされない。彼女がコロンブスを思い出すのは、自らそのことに気づく時である。こうして彼女はコロンブスをサンタフェへ呼び出し、航海の許可を与える。この短編が「西」セクションに収められているのは、スペイン女王の領土欲を心理的に分析しているからである。

「コーター」は乳母メアリについてのルシュディの自伝的回想である。書かれた時期は「愛する生誕国から亡命を無理強いされた状態」(EW, 178)とあることから、幽閉後と考えられる。乳母メアリの英語発音上の癖で「ポ」が「コ」、「ブ」が「フ」となるため、本当は「ポーター(守衛)」the Porter とすべき

ところを「コーター」the Courterと綴って題名にしている。物語は乳母メアリの手紙がはるばるインドからルシュディに届くところから始まる。内容は今や九十一歳のメアリが金に困っているというもので、ルシュディは早速金を送ってやるとともに、一九六二年から六四年にかけての出来事を思い出す。ルシュディがラグビー校へ入学して一年後の六二年に父母と妹たち、それに乳母メアリがロンドンへ移住してきてケンジントンに住みはじめる。彼らのフラットを含む建物全体の守衛ミシルが、乳母メアリによって「コーター」と呼ばれる中年男で、彼ら二人は意気投合する。ミシルはチェスの名人で、それと知らずに挑戦する少年ルシュディは幼児扱いを受け、深い屈辱を味わう。ルシュディの母と乳母メアリがビートルズカットの若者二人に言いがかりをつけられた際、ミシルは助けに駆けつけてナイフで腹を刺される。ルシュディの父はイスラム教徒ながら毎日ジョニーウォーカーを飲んでいる。ルシュディとその妹たちが夢中になっている音楽はレイ・チャールズ、チャビー・チェッカー、ニール・セダカ、エルヴィス・プレスリー、パット・ブーンなどである。ホームシックにかかったキリスト教徒の乳母メアリのためにクリスマスツリーを飾り、イスラム教徒のはずの子供たちが賛美歌を歌う。このようにこの短編は一九六〇年代初めのロンドンに住む西洋化したインド人ムスリム家族の生活に見られる「東、西」混在文化の実態と問題点を暗示し、そのテーマはやがて『悪魔の詩』で精緻に表象されることとなる。

ちなみに、乳母メアリはホームシックのあまり心臓が痛み、ボンベイへ帰ってしまうが、その後を追うようにルシュディの家族も一九六四年にロンドンの生活を引き払い、パキスタンのカラチへ移住する。ルシュディ自身はその年にイギリス市民権を獲得する。

## 16 『ムーア人の最後の溜め息』のころ

一九九五年にスウェーデン語版『悪魔の詩』の出版をめぐる、出版人のウィリアム・ナイガードがオスロで銃撃される。幸い命を取りとめた彼は『言論の自由の代償』*The Price of Free Speech* を出版し、ルシュディが「序文」を寄せる。「『悪魔の詩』出版関係者への攻撃は腹立たしい」と彼は述べている。「もし狂信がイスラム文化の一部だという勝手な理屈で許されるのであれば、自由を求め、そのために戦い、自由の名に命さえ捧げるイスラム世界の数え切れないほど多くの声—知識人、芸術家、労働者、とりわけ女性たちの声はどうなっ



てしまうのか。ウィリアム・ナイガードを撃った銃弾、イタリア人翻訳者エツトレ・カプリオロを傷つけたナイフ、日本人翻訳者五十嵐一を殺害したナイフに、いったいどんな『理論』があるというのか」(Step, 255)と。

この年の九月に彼は未来の三番目の妻エリザベス・J・ウェスト(E. J. W.)へ捧げる形で『ムーア人の最後の溜め息』を出版する。「ファトワ」以後初めての長編小説だが、これは一九九一年七月の五十嵐一氏殺害事件を契機に構想され、書きはじめられたと考えられる。と言うのも、一九九二年一月にはすでにルシュディが長編小説を執筆中であることが、ジャーナリストのフィリップ・ワイスによって明らかにされているからだ<sup>(22)</sup>。作品の完成もかなり早い時期、おそらく一九九三年だったと考えられるが<sup>(23)</sup>、ファンダメンタリストの危険な動きを考慮して、出版を見合わせていたのである。

サルマン・ルシュディは自らの幽閉生活に加えて翻訳者が暗殺されるという事態に改めて深く衝撃を受け、最早この先自由に生きられないという覚悟を決めた上で、幽閉者の手記という形式による『ムーア人の最後の溜め息』を書きはじめたと推測される。語り手のモラエス・ゾゴビーは冒頭で自らが幽閉者になっていることを告げる。死ぬ前に自分のことをすべて語ろうというわけで始めるのがこの三代にわたる家族年代記である。その舞台は四か所にわたるけれども、中心はルシュディがかつて「わが失われた街」と呼び、作中でも語り手がパセティックな呼びかけをしている街ボンベイであり、そこに語られる物語は香辛料で財をなした金持ちの家の二十世紀初頭から今日までの物語である。ナボコフの『アーダ』のように冒頭に家系図が掲げられ、この家系はゴアの出身で、そこにインド航路の発見者でポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマの血が流れていることになっている。そればかりではなく、ユダヤ人その他の血まで混じった雑種性が強調されている。ヴァスコ・ダ・ガマが辿り着いた街ゴアは四百五十一年間ポルトガルの植民地だったわけで、その間に人種間の複雑な混交があってもおかしくない。

『ムーア人の最後の溜め息』は『真夜中の子供たち』と同様、インドの歴史に焦点が合わされている。作者の念頭にあるのは二十世紀のインド百年の歴史である。語り手の曾祖父母の時代から始まる物語はインド独立へ向けてのもろもろの動きを捉えながら進む。独立から戒厳令の時代にかけては語り手の母親の時代だ。実は作品の真の中心人物はこの母親オーロラ・ダ・ガマなのである。彼女は「母なるインド」の象徴にほかならない。天性の画家である彼女はインドを映す「鏡」であって、独立後のインドが政情不安になれば、彼女の絵も不

安定になる。語り手が作者の分身だとすれば、語り手が語る母親のイメージは、そのままルシュディのインド観ということになるだろう。「最初、ぼくは母を崇拜し、やがて憎んだ。いますべての物語の最後に当たって振り返ると、いくばくかの同情を少なくとも発作的に感じることができる」(MLS, 223)とか、「ぼくの人生を変容させ、昂揚させ、滅ぼした女」(MLS, 237)などと語り手が母親を語る時、ルシュディは祖国インドについて語っているのである。表題はオーロラ・ダ・ガマの描く絵に由来する。夫エイブラハム・ゾゴイビーの祖先はアンダルーシアのムーア人の血を引いている。グラナダの最後のスルタンが被ったとされる王冠の話をおーロラは夫から聞き、彼女は連作形式で絵に描く。主題はアルハンブラに代表されるムーア人の文化、東西文化の混合から生まれ滅び去った雑種文化である。その体现であるオーロラ・ダ・ガマはまた「複合自我」の象徴でもある。

## 17 『真夜中の子供たち・テレビドラマシナリオ版』のころ

ルシュディは一九九六年十一月から十二月にかけての五週間で五話からなる『真夜中の子供たち・テレビドラマシナリオ版』を完成する。この作業の前と後には長い込み入った物語が隠されていて、テレビドラマシナリオ版がテレビドラマとならずに、一九九九年に単に活字としてのみ出版された時、ルシュディはその物語を「序文」で語った。それによると『真夜中の子供たち』が一九九三年に「ブッカー・オブ・ブッカーズ」(ブッカー賞創設二十五周年記念特別賞)を受賞したのを機会に、BBCとチャンネル・フォーからテレビドラマ化の話が出て、資金が豊富なことや知り合いのディレクターがいたことなどからBBCのほうを選んで計画を進めることになった。当時ルシュディにはシナリオを書く時間も気力もなく、テレビドラマ専門のシナリオライターによる脚色で話が始まったのだが、シナリオライターとディレクターの意見が合わなかったことや、その他の事情から、計画が頓挫しかかる。長引く計画遅延の間にルシュディの身辺事情が変わり、脚色のひらめきもあって、彼自身がシナリオを書くことになり、それを五週間で仕上げた後、スタッフやキャストも決まって撮影ができる状態になる。しかしインド政府が撮影を許可しないことになって、またしても計画が頓挫する。計画が練り直され、スリランカ政府に打診して撮影許可をもらい、話が好転するかに見えたが、スリランカの国内政治事情から今度もまた土壇場で計画が潰れ、それが最後になってしまう。このようなシジ

フォスの徒勞の後で、脚本が活字のみで世に出ることになったのである。

この脚本でルシュディはももとの物語にいくつか改変を加えている。まずピープショー屋のリファリファ・ダスがそれぞれの挿話を紹介するという趣向が取り入れられ、ドラマ全体が一種のピープショーとして提示されている。そのため、サリームが時々ピープショーの観客となることもある。この趣向の中でオリジナルなエピソードが取捨選択され、登場人物の運命も変更される。とりわけサリームとシヴァの対立関係が明確にされることで劇的効果が図られている。

『真夜中の子供たち』のテレビドラマ化に関わりながら、一九九七年のインド独立五十周年にちなむエッセイ「豊富の国」を雑誌『タイム』八月十一日号に発表するが、これは「複合自我」表象を論じるわれわれにとってきわめて重要なエッセイであり、別途詳しい分析が必要となるが、要するにここで彼はわれわれ現代人の「自我」が「複合的」にできていることを指摘したのである。

同じ八月に彼はエリザベス・ウェスト Elizabeth West と結婚し、同時に彼にとって二番目の息子ミラン Milan が誕生した。

一九九八年九月二十五日付英米新聞各紙はイラン政府が「ファトワ」を撤回したというニュースを報じた。国連総会出席のためにニューヨーク入りしたイランのハタミ大統領が前々日の記者会見で「ファトワは完全に終わった」と述べたのを受け、前日ハラジ外相がイギリスのクック外相に「『悪魔の詩』の著者およびその出版関係者の生命に対する脅迫に関し、イラン政府はそうする意図を持たず、そのためのいかなる行動も取らないし、またいかなるものに対してもそれを奨励したり扇動したりすることはない」と説明した<sup>(24)</sup>。この情報をイギリス政府に確認したルシュディは翌日記者会見し、「私が国家による保護を必要としたのは国家によって脅されていたからだ」とし、その必要がなくなったとはいえ「人によく知られている人間が心得なければならないちょっとした持続的な警戒が必要だと思う」と語った<sup>(25)</sup>。しかしながら、一九九七年八月に就任したハタミ大統領の自由化路線を反映する宥和の動きと反対に、イラン国内の「保守派」はルシュディ追求の手を緩めないことを表明し、新たな賞金を設けたりもしていることを付け加えておかなければならない。

劇場版『ハルーンと物語の海』の舞台公演が一九九八年九月二十五日にティム・サップルの演出によりロンドン、サウスバンクのロイヤル・ナショナル劇場で始まった<sup>(26)</sup>。

一九九九年二月三日にはロンドンのインド大使館がルシュディへのインド入

国ビザを発給し、彼にとって待ち焦がれていた祖国再訪が可能になる。彼はインド政府による発禁措置や入国拒否に最も心を痛めていると、『タイムズ・オブ・インディア』（一九九三年九月十二日付）とのインタビューで語っていた。

## 18 『彼女の足下の地面』から『この境界を越えよ』まで

一九九九年四月には二番目の息子ミランへの献辞をつけて、長編『彼女の足下の地面』を刊行する。

この作品はウミード・マーチャント、オルムス・カーマ、ヴィーナ・アプサラという男女三人の物語である。物語が始まって間もなく、アメリカの人気ロック歌手ヴィーナがメキシコ西海岸で大地震に遭遇して死ぬ。その衝撃がさめやらぬうちに、彼女の恋人の一人で写真家のウミードが回想を始める。彼は全知全能の語り手で、自分のことはもとより、残り二人とその周辺の人物たちについてすべて知っている。主要人物三人には三様の物語があり、三本の支流が最後に一本になってアメリカへと流れ込む。ウミードの流れはインドのボンベイに始まり、アメリカへ向かう。オルムスの流れはボンベイからイギリスを経てアメリカへ向かう。最も複雑なのはヴィーナ・アプサラの流れで、アメリカからボンベイへ向かい、さらにそこからイギリスを経てアメリカへと戻る。彼らの生年はオルムスが一九三七年、ヴィーナが一九四四年、そしてウミードは作者ルシュディと同じ一九四七年である。ヴィーナが自殺するのは一九八九年二月のヴァレンタインデー、つまりホメイニが「ファトワ」を宣告した日であるが、その時彼女は四十五歳ということになる。その日まで彼ら三人がどのように生きてきたかが語られるわけだが、三人とも作者の分身と考えてもそれほど齟齬はない。ヴィーナは女だが、その死によって、「ファトワ」を宣告された作者自身の絶望を具現したと考えられる。オルムスは作者よりも十歳年上だが、作者のイギリス体験がこの人物に投影されているし、「オルムス・カーマの中にはあまりにもたくさんの人がいる」（GBF, 299）とあるように、作者のモチーフである「複合自我」を体現している。ウミードは作者と同年生まれであり、この人物には作者のボンベイとインドへの思い入れが託されている。実際、ウミードはルシュディその人であるとする書評もある<sup>(27)</sup>。

黄泉の国へ下る音楽の神オルフェウスの神話をも組み込み、「陽気な大言壮語」<sup>(28)</sup>の語り口によるこの小説は、西部開拓時代以来、「境界」を越えることに特色を持つアメリカの要素が「複合自我」の構成要素に全面的に参入してき

た点で注目される。ルシュディとアメリカの関係を示すものとしてはメアリアン・ウィギンズとの夫婦関係があるが、メアリアンはギリシャ系アメリカ人である。ロックンロールのスーパースターとなるヴィーナ・アップサラがインド人とギリシャ系アメリカ人の混血だという設定は、ヴィーナのモデルの一部にメアリアン・ウィギンズがいたことを窺わせる。

一九八九年のヴァレンタインデーという特別な日から始まることが端的に示すように、これは処刑命令後十年の作者自身の経験を虚構化した作品だとルシュディ自身が語っているが、その経験を手短かに言えば「大地震」を経験したようなもの (Chauhan, 264) だという。そうであるがゆえに、実際には起こっていない大地震を一九八九年二月十四日にメキシコ西海岸に起こし、物語を始めたのである。この架空の地震は実はウミードすなわち作者の内面に起こった途轍もない衝撃のことなのだ。

「ファトワ」後の幽閉生活の中でルシュディは人間として、また作家として、人一倍「自由」を求めつづけていた。「自由」は彼になんらかの形で制限を加える境界線を突破しなければ得られない。自由を求める「越境」という、ルシュディが思い描くイメージの客観的相関物が、『彼女の足下の地面』の場合、ロックンロール音楽なのである。一九九九年四月に彼はロックンロールについて次のように書いている。

このごろはもう、ギターを叩きつけたり、あらゆることに抗議したりといったことはだれもしないし、ロックンロールは中年化し、法人化され、方向転換した主導的売れっ子グループの数は方向転換した小国家の数を上回るという現状があり、ガキどもがギャングスタ・ラップ、トランス・ミュージック、ヒップ・ホップなどを聞いている時に、ロックンロールは自分たちの全盛期を思い出す年寄りたちの音楽となり、ボブ・ディランやアリーサ・フランクリンが大統領就任式に招かれて歌うという時代では、この種の歌の反抗的な起源やら反体制的全盛期を忘れ去ることは容易だ。しかし、ロックンロールの荒っぽい、自信たっぷりな反逆精神こそ、この奇妙で単純で圧倒的な騒音がほぼ半世紀前に世界を制覇し、言語と文化のすべての境界や障壁を越えていき、歴史上、二つの世界大戦に加えて三つ目のグローバルな現象となった理由の一つである。それは解放の音であり、そのため至るところの若者たちに語りかけ、従ってまた、当然ながら、われわれの母親たちはそれを好きになれなかった。(Step, 270)

ロックンロールの「越境性」と「反逆精神」を体現した人物がヴィーナ・アプサラであり、作品の中での彼女の行動がそれを物語っている。その詳細は別の箇所へ譲ることにして、ここで注目したいのは、いま引用した一九九九年四月のエッセイの中で、ルシュディが次のように言っていることである。

自由の音楽は人々を驚かせ、あらゆる種類の防衛メカニズムを作動させる。オルフェウスが歌声を張り上げている限り、マイナスたちは彼を殺せない。そこで彼女らは金切り声を上げ、その甲高い不協和音がオルフェウスの歌声を呑み込む。そのようにして彼女らの武器が的を射ると、オルフェウスは倒れ、そのからだは八つ裂きにされる。

オルフェウスに逆らって金切り声を上げれば、われわれもまた人殺しができる。共産主義の崩壊、鉄のカーテンと [ベルリンの] 壁の解消は新しい自由の時代を招くと考えられた。ところが、突然不定形となって可能性に満ち満ちた冷戦後の世界はわれわれの多くを怯えさせ、縮こまらせている。われわれはよりちっぽけな鉄のカーテンの陰に引きこもり、よりちっぽけな柵囲いを作り、かつてないほど狭量で、そのくせファナティックな自分たちについての定義——宗教的、地域的、民族的定義——の中に自分たちを閉じ込め、戦争する気になって身構えている。

今日、そうした戦争の藪がわれわれの内なる、よりましな自我の、甘い歌声を掻き消す時、ぼくは、かつて伝染病のようにロックンロールに感染し、それでも（ヴェトナムでの）もう一つの戦争を終わらせるのに役立ったあの昔の独立心や理想主義が懐かしくなる。しかし目下のところ、あたりに聞こえる唯一の音楽は死の行進曲だ。(Step, 271)

彼はここで「かつてないほど狭量で、そのくせファナティックな自分たちについての定義——宗教的、地域的、民族的定義——の中に自分たちを閉じ込め、戦争する気になって身構えている」人間たちの存在を指摘し、冷戦後がテロリズムの時代になりつつあることを予感している。ルシュディの言う「複合自我」は狭量な自己定義と正反対のものであることをわれわれはここで思い出す必要がある。「複合自我」の思想からはテロリストは生まれない。それはより広い自由を求めて「越境」し、保守的立場を取る人間の神経を逆撫でするかも知れないが、「戦争する気になって身構え」るようなことはしない。それをするのは「宗教的、地域的、民族的」に狭く自分を追い込んでしまうものたち

だけである。しかしながら、狭量でファナティックな自己定義に身を任せる人間たちが世界に増えていることをルシュディはここで予感しているわけで、不吉なことにその予感は二年半後の二〇〇一年九月十一日に的中する。

なお『彼女の足下の地面』のヒロイン、ヴィーナ・アプサラについては、インド出身のロックンローラーで一九七〇年代に活躍したアシャ・プトリ Asha Puthli をモデルにしたのではないかという見方がアスジャド・ナズィル Asjad Nazir によって提出されたが<sup>(29)</sup>、ルシュディはそれを真っ向から否定した<sup>(30)</sup>。その際、彼はこの作品の完成に「四年以上」かかったと告白している。

ルシュディは二〇〇一年八月に新しい恋人パドマ・ラクシュミ Padma Lakshmi への献辞を付けた小説『怒り』Fury を刊行する。これはイギリスへ妻子を残して、一人でニューヨークに住む中年男マリク・ソランカ教授の精神的彷徨の物語である。ボンベイ生まれでケンブリッジ出身という作者自身の伝記的枠組みがマリク・ソランカに付与され、作者の新たな根無し草生活が投影された作品となっている。

そして二〇〇二年九月に彼は第二評論集『この境界を越えよ』Step Across This Line を刊行する。ここには、一九八九年の『悪魔の詩』事件以来、誤解や曲解の的にされているこの重要な現代作家が、二〇〇〇年における英国から米国への移住、および二〇〇一年の「9・11」体験をも含む過去十年間に、いかなる思想を深めてきたかが如実に示されている。

「この境界を越えよ」という題名は彼が二〇〇二年二月にイェール大学で行った特別講義題目から取ったもので、本全体のキーワードにもなっている。彼はインドから英国への、さらには英国から米国への「移民」として国境を越えた人間だが、「境界」は国境に限らないというのが彼の見方である。故アヤトラ・ホメイニによって出された「処刑命令（ファトワ）」後の幽閉生活の中で、ルシュディは人間として、また作家として、人一倍「自由」を求めつづけていた。「表現の自由」を始めとする「自由」は、彼になんらかの形で制限を加える境界線を突破しなければ得られなかったからである。

すでに触れたよう、彼は自由を求めての「越境」の先例として、ロックンロール音楽を挙げる。「言語と文化のすべての境界」を越えて若者たちに語りかけたからである。表現上の境界を越えた別の実例として映画『オズの魔法使い』も論じている。そこでは現実と空想の間に境界があり、そこを越えたところに映画の斬新さがあったというわけである。

彼はまたアメリカの「フロンティア」=境界上の地域について論じる。それ

を押し広げることがアメリカの歴史であった。同時にアメリカは自由のための境界も押し広げてきた。しかし、「9・11」を境にアメリカは自由を失いつつあると彼は指摘し、「セキュラリズム」の立場から強い警鐘を鳴らす。「セキュラリズム」は神でなく人間中心の世俗主義、政治的には政教分離主義のことが、彼が「セキュラリスト」としての自己の立場を明確化したのは、「ファトワ」四周年に際して行った母校ケンブリッジ大学での講演においてである。繰り返しになるけれども「過去四年間に、このセキュラリズムという理念とその副次的原理である多元主義、懐疑、寛容への関わりは二倍にも三倍にも深くなった」(Step, 232)とそこで述べたのであった。また、彼の立場からすると「狂信がイスラム文化の一部だという勝手な理屈」(Step, 255)は許されないのである。

この評論集に集められたエッセイにはわれわれがすでに触れたものも少なくないが、それらを含めた過去十年間のルシュディの散文が一卷にまとめられたところに意義がある。「9・11」以降、「多元主義」や「寛容」の普及はますます難しくなりつつあるが、そのような時期であればこそ、「セキュラリズム」の立場を説くこの評論集はますます重みを増してくると思われるが、「セキュラリズム」と「複合自我」概念は表裏一体の関係にあることにわれわれとしては留意したい。

#### 注

(省略記号) M=*Midnight's Children* IH=*Imaginary Homelands* WO=*The Wizard of Oz*  
Step=*Step Across This Line* EW=*East, West* MLS=*The Moor's Last Sigh* GBF=*The Ground Beneath Her Feet*

- (1) *The Sunday Times*, 16 February, 1992
- (2) *Pris du Meilleur Livre Etranger* (最優秀外国小説賞)
- (3) St Peter's Street, Islington, London
- (4) *The Observer*, 27 September, 1998
- (5) *The Sunday Times*, 9 April, 1989
- (6) *Daily Mail*, 27 April, 1989
- (7) *The Sunday Times*, 25 June, 1989
- (8) *The Observer*, 2 July
- (9) Frances Hill の書評参照。 *The Times*, 17 February, 1990



- (10) *The Sunday Times*, 31 March, 1991
- (11) *The Observer*, 28 January, 1990
- (12) *The Times*, 5 February, 1990
- (13) *The Sunday Times*, 18 March, 1990
- (14) *The Guardian*, 18 August, 1990
- (15) *The Sunday Times*, 16 February, 1992
- (16) *The Sunday Times*, 16 February, 1992
- (17) *The Observer*, 4 July, 1993
- (18) *The Observer*, 4 July, 1993; Step, 235
- (19) *The Nation*, 26 July, 1993
- (20) Marvin Martin, "Nasrin, Taslima," *Encyclopaedia Britannica* および Taslima Nasrin, *Meyebela, My Bengali Girlhood* 参照。
- (21) 寺門泰彦「訳者あとがき」(「東と西」所収) 214頁および齊藤吉史「インドの現代政治」(朝日新聞社, 一九八八) 252頁参照。
- (22) Philip Weis, "The Martyr", *Esquire*, January 1993. 邦訳「サルマン・ルシュディの優雅にして傲慢な潜伏生活」(拙訳), 「エスクァイア日本版」1993年2月号所収。
- (23) See Rushdie, "Introduction" to *The Screenplay of Midnight's Children*, 4.
- (24) *The New York Times*, 25 September, 1998; *The Times*, 25 September, 1998.
- (25) *The Boston Globe*, 26 September 1998; *The New York Times*, 26 September, 1998.
- (26) *The Independent*, 25 September, 1998.
- (27) See, Michael Gorra's review on the novel, *TLS*, April 9, 1999.
- (28) Michael Gorra, *TLS*, April 9, 1999.
- (29) *The Sunday Times*, September 16, 2001.
- (30) *The Sunday Times*, September 23, 2001.

## References

- Chauhan, P. S. ed. (2001) *Salman Rushdie Interviews*, Greenwood Press.
- MacDonough, S. ed. (1993) *The Rushdie Letters*, University of Nebraska Press.
- Nasrin, T. (1997) *Shame*, Prometheus Books.
- (1998) *Meyebela: A Memoir of Growing Up Female in a Muslim World*, Steerforth Press.
- Philip Weis, "The Martyr", *Esquire*, January 1993. 邦訳「サルマン・ルシュディの優雅にして傲慢な潜伏生活」(拙訳), 「エスクァイア日本版」1993年2月号所収
- Rushdie, S. (1977) *Grimus*, Panther.
- (1982) *Midnight's Children*, Picador. (邦訳「真夜中の子供たち」寺門泰彦訳, 早

- 川書房, 1989)
- (1983) *Shame*, Jonathan Cape. (邦訳『恥』栗原行雄訳, 早川書房, 1989)
- (1987) *The Jaguar Smile: A Nicaraguan Journey*, Viking. (邦訳『ジャガーの微笑 ニカラグアの旅』飯島みどり訳, 現代企画室, 1995)
- (1988) *The Satanic Verses*, Viking. (邦訳『悪魔の詩』五十嵐一訳, プロモーションズ・ジャンニ, 1990)
- (1990) *Haroun and the Sea of Stories*, Granta Books. (邦訳『ハルーンとお話の海』青山南訳, 国書刊行会, 2002)
- (1991) *Imaginary Homelands*, Granta Books.
- (1992) *The Wizard of OZ*, British Film Institute.
- (1994) *East, West*, Jonathan Cape. (邦訳『東と西』寺門泰彦訳, 平凡社, 1997)
- (1995) *The Moor's Last Sigh*, Jonathan Cape.
- (1999) *The Ground Beneath Her Feet*, Jonathan Cape.
- (1999) *The Screenplay of Midnight's Children*, Vintage.
- (2001) *Fury*, Jonathan Cape.
- (2002) *Step Across This Line*, Random House.
- Stern, L. (1967), *The Life & Opinions of Tristram Shandy*, Penguin Books.
- Wiggins, M. (1989) *John Dollar*, Penguin Books.
- 齊藤吉史『インドの現代政治』朝日新聞社, 1988